

日本文学の「果て」

——サンパウロの遠藤書店——

エドワード・マック

ケンブリッジ大学のウィリアム・セント・クレアは2004年に出版したThe Reading Nationの中に於いて、多くの読書に関する研究に通底する「読書はメンタリティー、考え方を形成し、国家の行方を決定する」という仮説を問題とした。セント・クレアの指摘は、テキストの研究は読者がテキストそれ自体に接するという最も初期的な段階をしばしば飛び越してしまうことにある。言うまでもなく、文学が社会現象になる為にはテキストの流通が不可欠である。私もこの重要な問題点に注目し、第二次世界大戦前のブラジルにおける日本語テキストの読者という脈絡の中で考えてみたいと思う。発表にはブラジルで当時、日本語書籍を扱っていた最も大きな遠藤書店に焦点を当てることとする。遠藤書店を中心にした読書共同体の存在は、単に日本近代文学の「果て」だけでなく、日本語による言説全体の「果て」を意味するという点に於いても注目に値すると考えるものである。よって、戦前ブラジルの書物市場の輪郭を新聞広告、書店主の家族のインタビュー等を通じ掴むことに努めた次第である。

既存の事実ながら、20世紀の初め、日本政府は帝国の拡大に加え、他国への大規模な移住を後援した。そして、その移住先の一つはブラジルであった。20世紀におけるブラジルにて確立された多世代日系コミュニティは、ブラジルの全人口の中でかなり大きな民族のサブセットになり、今日、ブラジル日系人の数はおよそ130万人に達している。

1908年から始まったこれらの移住運動は新しいニーズ発生のきっかけとなった。移住の最初の頃より、日本の企業は、外国ですぐに入手できない商品を求める移住者の要求に応じた。これらの企業が最初に発送したものは醤油、種、薬、日本の農具、食品など生活必需品であった。しかしまもなく、祖国からの新聞、雑誌、本など、印刷に対する需要も現れてきた。たくさんの移民が農業にしばしば熱中していたにも関わらず識字率がかなり高かった為である。当時の調査によると、1908年から1941年に於ける15歳以上の移民3万3000人の教育レベルは0.3%文盲、0.2%が正規の教育がないまでも基本的な読み書きができ、74.2%が小学校、22.5%が中学校までの、又2.8%がそれ以上の教育を受けていたとされる。

初期の移民のコミュニティによくあるように、祖国の本を読む為には1) 日本から持参 2) 友人から借用 3) 直接出版社に注文 4) 商店か雑貨屋を通し購入、という四つの方法があった。私の知っている限り、最初期の本の広告はサンパウロ市内にある木藤(キドウ)という名前の雑貨店から出た。1918



図1 木藤商会 (『伯刺西爾時報』1918年2月1日)

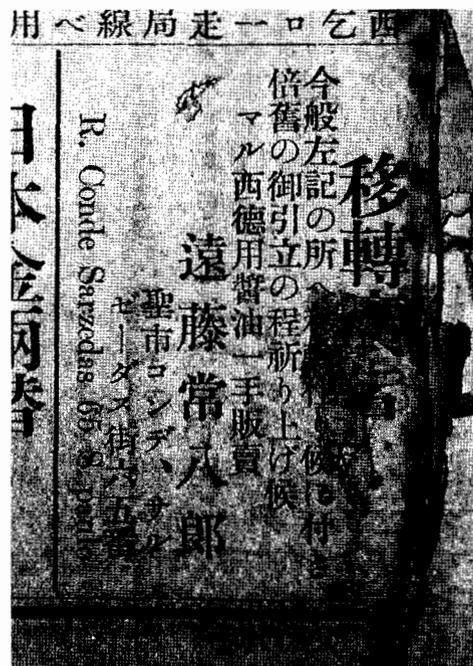


図2 遠藤常八郎 (『伯刺西爾時報』1917年9月14日)

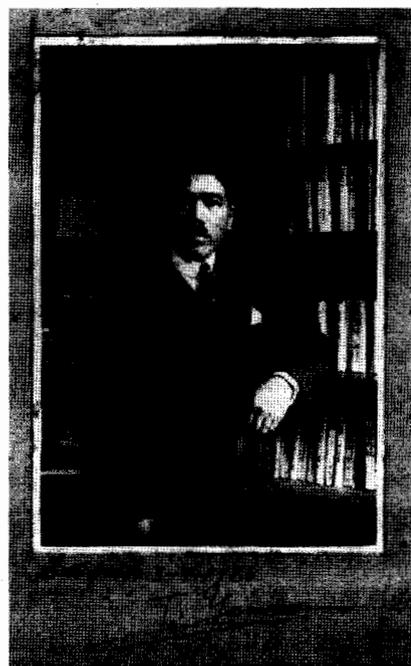


図3 遠藤常八郎 (現1926年・遠藤マリオ氏提供)

年の本の広告が実存する。[図1]。述べるまでもなく、本の販売はその雑貨店の本業ではなかった。つまり、そこでは大工道具、薬、袋と醤油が中心として扱われていた。

戦前の間にブラジルにて本を取り扱った雑貨店は幾つかあった。しかし恐らく、数少ない書籍専門の一つであった遠藤書店が、最も多い在庫を所有していたと思われる。

店主である遠藤常八郎の名前を見つけた最も早い時期の広告は、1917年のものである。[図2]。自分が引越したことを発表しており、言うまでもなく、この広告は彼がこの広告以前にサンパウロで活動していたことを明らかにしている。この広告では、彼がマル西醤油の販売を一手に引受けているということを誇らしげに示している。

彼の息子(マリオ)によれば、遠藤は1890年頃生まれ、1960年頃亡くなっている[図3]。彼は、1913年(約23才)に、サンパウロへ渡った。彼の最初の仕事は、医者助手であった。1917年には彼の妻(モト)も来伯した。

1920年の広告にて、遠藤は様々なものを販売する店としての開店を告知する[図4]。広告によると、彼の店はキャンディ、薬、雑貨、殺虫剤噴霧器を販売し、郵便と他の公文書を取り扱っていた。最後に、彼は本を貸すことも宣伝している。この頃から、遠藤の広告は定期的に現れることとなる。そして、しばしば本に触れている。店はサンパウロの市内にはなかった。アドレスは Biriguy (Birigui) (サンパウロ市から520km離れた所に位置する町)の私書箱として伝えられている。

サンパウロ州にある店がサンパウロ市本店の支店であったかどうかは、明確ではない。1923年の広告により、遠藤はその当時、サンパウロ市にも店を所有していたことがわかる。推測か

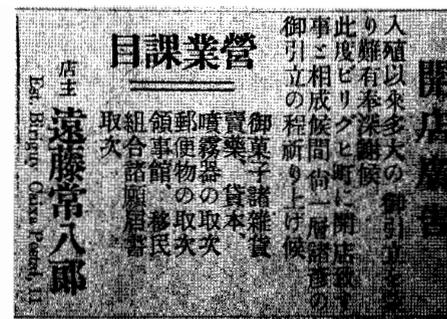


図4 遠藤常八郎 (『伯刺西爾時報』1920年8月13日)

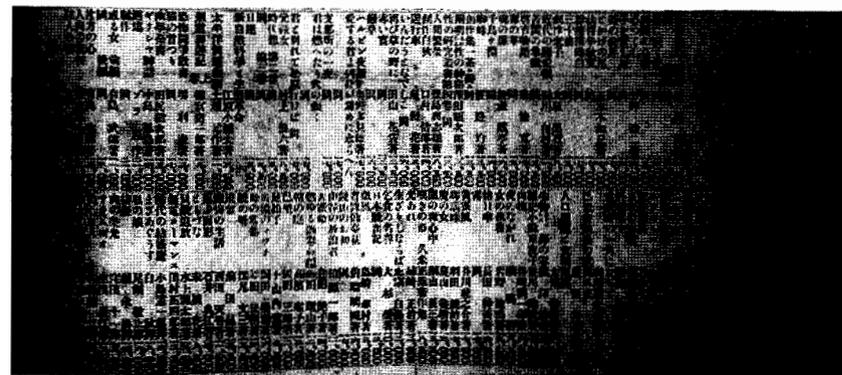


図5 遠藤商店 (『伯刺西爾時報』1924年12月19日)

ら1923年9月の初めに、遠藤は(「遠藤商店」と名付けられている)店を市内の新しい場所に開いている。マリオに聞いたところによると、この時分よりほぼ完全に本や雑誌の専門店となり、地方巡回販売も開始されている。1924年の大々的な広告からは、本がこれまでより中心的な役割を引受けていたということが見受けられる[図5]。

広告では、遠藤は自分の客達に一年強前に開業された店の後援の感謝を述べることから始めている。その続きは次のとおりである：

母国の文化は日に月に進んで居ます。皆さん方は母国の文化に御遅れになる様なことはありませんまい？ 此意味に於て弊店は特に新刊書籍を輸入して皆さんに御願する(ママ)を一つの社会奉仕と心得て居ます 世にありふれた講談や小説と其越(ママ)を異にして居ます新年の読物としてどしどし御用命を願上ます

「祖国」の文化に遅れるという心配が、本を買う主要な誘因として使われていることがわかる。そして、貸本用の在庫が増えたことが書かれている。マリオによれば、遠藤書店は戦争前に本と雑誌を貸したが、古本は殆ど取り扱わなかった。1943年に本が政府によって没収されたとき、貸出しが終了した。

広告の大部分は販売中の本にあたる。多数の本がリストアップされている。里見トン、宇野浩二、菊池寛、泉鏡花、田山花袋、村上浪六、廣津和郎が書いた小説も含まれている。価格は、

8.5 mil réisから 26 mil réisの間であり、大部分の小説はその間の価格にあたる。

価格の転換は難しいが、参考のために1924年の記事を引用すると、米と牛肉の小売価格は1キロにつき1.8 mil réis、豚肉は2.8 mil réis、1ダースの卵は2.6 mil réisにて販売されていた。対照的に、同年の広告からは、芥川龍之介の「春服」が元値2円50銭より18,000mil réisであげられていることが見受けられる。すなわち、1924年の後半において、サンパウロで生活する移民は、この322ページの短編集を購入する為に、10キログラムの牛肉を控えなければならなかった。

1926年4月の広告より更に興味深い二点に注目することができる。第一に、広告の右上に月遅れの雑誌を10 mil réisの特別価格で販売する宣伝が記載されている。その価格は送料を含んでおり、これは多くの顧客が直接店に行ける状況にはなかったことを示唆しているものであろう。第二に、広告の左上には地方の顧客の為に巡回読書会が発表されている。これは永嶺重敏が「<読書国民>の誕生」(日本エッセイタースクール、2004年)で描写している内地の状況に似ている。巡回読書会に触れるのはこれが最後となっており、この活動が失敗に終わったことを示唆している。これも又、永嶺の日本に関する調査結果と一致している。

1926年7月の広告は新着入手の雑誌をリストアップしている[図6]。まず、号の遅れに注目願いたい。「実業之日本」は5月1日と15日からあり、「婦人雑誌」は、6月号となっている。価格も注目に値する。「実業之日本」は2.3 mil réisで、「婦人雑誌」は3.9 mil réisとある。「太陽」、「改造」、「雄弁」などに触れてはいるが、「中央公論」には触れていない。

1927年の広告は遠藤商店がまだ本の専門店ではなかったことを思い起こさせる。新着図書のリストを掲載している大きな広告には、到着した新しい種のリストも記載されている。大根が4種類、白菜が1種類、カブが1種類、からし菜が1種類、とある。

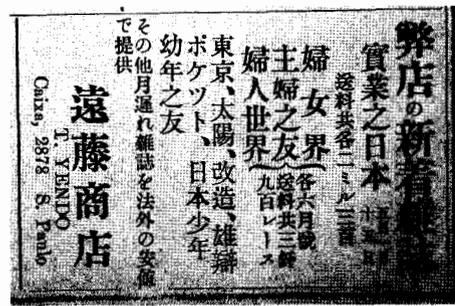


図6 遠藤商店(『伯刺西爾時報』1926年7月9日)

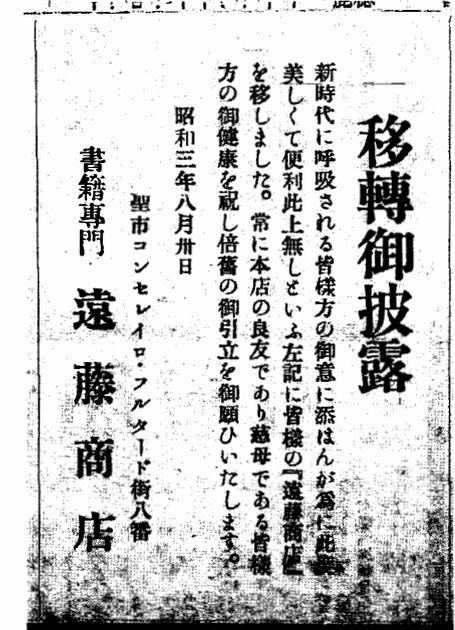


図7 遠藤商店(『伯刺西爾時報』1928年8月30日)

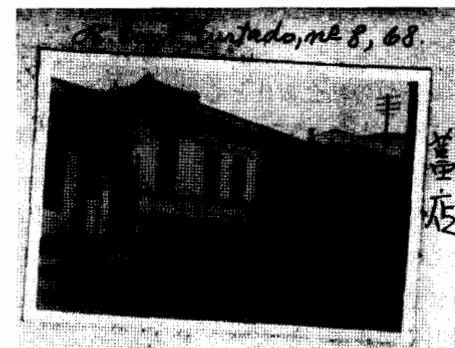


図8 遠藤商店(現1928年・遠藤マリオ氏提供)

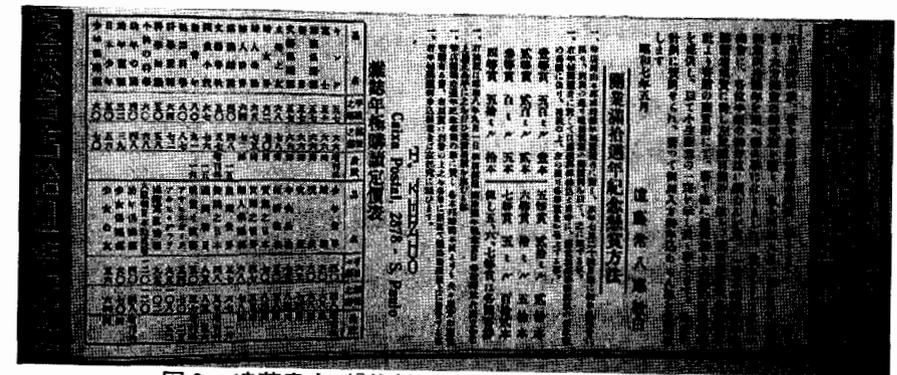


図9 遠藤書店(『伯刺西爾時報』1932年5月19日)

しかし、1928年の広告にて遠藤商店は、「書籍専門」と宣伝している[図7]。また、この広告により商店が([図8]の店に)再び引っ越したことを読者に通知している。

遠藤の広告から、本の入手可能性、日本からの配達遅延、そして価格についての手掛かりが得られる。例えば、改造社より1928年から1930年に出版された新選名作集は、1930年8月21日までに、日伯新聞の広告に現れる。いろいろな著者(島崎藤村、宇野千代、宇野浩二、里見トシ、佐々木茂索、室生犀星、久米正雄、相馬泰三、岡本綺堂と山本有三)の選集が送料込で各々9 mil réisにて販売されていた。この広告が載った頃、このシリーズは日本にて未だ出版中であった。リストにある中で最新のものは1929年9月15日に出版された宇野千代の巻であった。シリーズのその後の8巻は1930年8月以前に日本にて出版されたが、ここには記載されていない。これらの巻の元の販売価格は、一円であった。



図10 賞品(現1933年・遠藤マリオ氏提供)

遠藤が遠藤商店の代わりに遠藤書店という名前を使い始めるのは1932年のこの広告からである[図9]。彼の店が翌年(1933年)の9月1日に営業10周年を祝うことを発表した際に、新しい名前をそれとなく使ったものである。広告は同時に、出版社が提供する記念品を発表している。このことが事実であれば、遠藤は出版会社と何らかの関係があり、それらの会社が、遠藤をある程度、重視していたと考えられる。記念品をもらう為には雑誌を講読していなければならなかった。年間雑誌購読料は自ら店に購入しに来る顧客と郵送を必要とする顧客の為のものである。1933年の広告は記念品贈呈の規則が変わったことを伝えている。そして、出版業界の悪化を理由に、記念品の幾つかはなくなっていった。しかし、大部分はそのまま残り、記念品贈呈となった本を提供したそれぞれの出版社名さえリストに挙げている: 中央公論社が85冊、実業之日本社が10冊、婦人界社が40冊等。幾つかの商品の写真が、まだ存在する[図10]。

1934年の広告は、店が再び移転したと読者に通知している[図11]。

この前後に、遠藤は市外でも取引をしている。この1934年の広告には中央公論社より出版された「非常時国民全集」の取扱いをするサンパウロの市外の11箇所の販売所のリストが記載されている。遠藤マリオによれば、アマゾニアを含む、ブラジル中至る所に多くの本と雑誌を郵送して、国中の小売業者のために、割引で取り次ぎ業を行った。印刷物の大量の在庫を持っていたからであろう。1935年までに、遠藤は本の目録を、全紙面広告で載せる[図12]。特筆に価するに、これらの本の全てが買い切り制にて購入されたと考えると、これは相当な量の在庫数である。

本だけではなく、雑誌も大量に購入されていたそうである。ブラジルへの移住者の総数が17万人を超えた1935年、ある記事に日本語の雑誌市場の規模が描写されている。その記事によると、1935年8月は1万冊以上の日本語の雑誌がブラジルに輸入された最初の月として祝われている。最も広く読まれた雑誌は「キング」であった。その売上は総数の35%を占める3,500部であった。次に「主婦の友」は1,200部、対して「改造」は80部のみであった。

1939年に日伯新聞社にとって作られた年鑑には、サンパウロの二つの主要な路線、ノロエステとパウリスタ沿線のバウル地域のおよそ11,500の家庭の読書習慣の調査が載っている。その調査から、これらの家庭のうち1,000軒強が「子供用」雑誌を購入し、2,000軒強が「女性誌」を購入し、6,000軒強が「男性用」と呼ばれた普通雑誌を購入し、そして10,000軒強が新聞を購入したことが明らかになっている。読まれていた新聞の殆どはブラジルで発行されたものだったということが調査からわかる。

1937年の遠藤書店の広告は、本をカテゴリー別に宣伝している。文学書と小説の間において面白い区別が見受けられる。前者（「文学書」に）は西鶴を、後者（「小説」に）は菊池寛と十返舎一九を含んでいる。「文学書」は15から20 mil réis, 「小説」は7から16.2 mil réisの間で価格表示がされている。

1939年の広告が新年号の「文化」という地元の雑誌をあげ、そしてその新しい邦人植民文学



図11 遠藤書店（現1934年・遠藤マリオ氏提供）

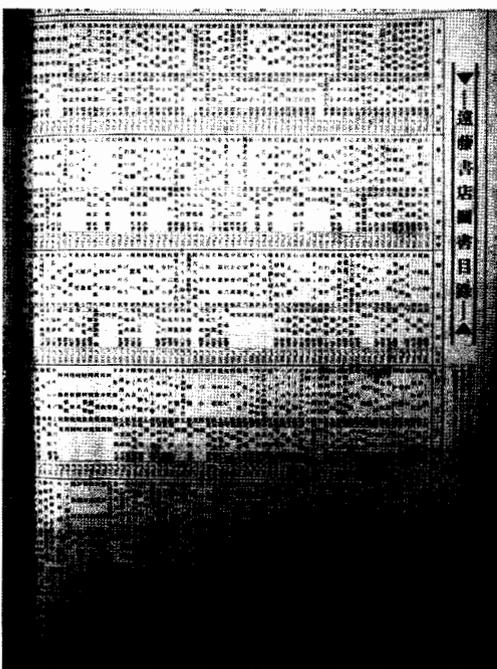


図12 遠藤書店（『日伯新聞』1935年12月18日）

賞を発表している。しかし残念ながら、結局受賞作品は選ばれなかった。この雑誌は、遠藤書店によって発行されていたものである。印刷施設は人文研の脇坂勝則によれば、遠藤書店の地下室にあったそうだが、遠藤マリオによると他の場所にあったとのことである。いずれにせよ、雑誌の売れ行きは良かったとのことである。遠藤は1939年の広告に、植字工を求める広告を掲載した。

遠藤は新着の本の目録の広告を一ページか半ページで1941年までの間、定期的に載せていた。私が見つけた最後の広告は、1941年8月8日発行のブラジル時報に載っている。

その広告では、幾つかの本の10-15%の価格上昇が発表されている。この頃始まった急速なインフレの影響がここに見られる。ブラジル時報の最終号は、1941年8月31日に発行されたようである。

1941年8月13日にサントス港に到着したブエノス・アイレス丸は、日本を出発し400人強の新しい移民を乗せていた。彼らが戦前最後の移民達である。カサト丸の到着以来33年間に、190,000人の移民が日本からブラジルに渡った。日本からの輸入が途絶えるのは、最後の貨物船が1941年11月にブラジルに到着した後である。

1942年1月19日に、サンパウロ保安局が、敵国の国民に対して法律を發布した。この法律の一部として、日本語のテキストの配布、公共の場での日本語使用、そして特別な許可のない旅行が禁止された。ちなみに、それはこの勝ち組・負け組み問題を悪化させた。1943年に、ドイツがブラジルの船を撃沈したせいで、ブラジルは連合国軍に入った。マリオによると、その後、遠藤は本屋をたたんで、ブラジル国内の商品を扱う雑貨屋に戻った。政府による通達の後、遠藤は本を倉庫に保管していた。その準備には、一週間しか余裕がなく、まもなく政府が方針を変えて、書物を接收した。この時、家族は在庫を全て隠そうとしたが、それが発覚し、書物全部が没収され処分された。

1949年に、店は再び開店した。日本では殆ど何も生産されていなかった為、商売は古本が中心となった。四つの雑誌の海外版がよく売れた。1955-56年から、日本の製品は、かなりの量で流入し始めた。1965年頃に遠藤書店は閉店となった。

今回の論文に一応「日本文学の『果て』」という題をつけてはみたが、まだ、このテーマにとりかかったばかりである。「日本文学」の境界を考えるなら、この日本国民国家から地理的に一番離れている場所も考えなければならぬと考えたからである。実は、サンパウロにおける日本語文学活動は「日本文学」に当たるか否か、と言うより、この「果て」を通して「日本文学」という概念自体を問い直し、また機会を改め、論じたいと思っている。

『立命館言語文化研究』編集委員会

委員長 中川成美
委員 秋林こずえ
河原典史
梅咲敦子

立命館言語文化研究 20巻1号(通巻93号)

2008年9月25日 印刷

2008年9月30日 発行

発行者 中川成美

発行所 立命館大学国際言語文化研究所

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL (075) 465-8164

E-mail : genbun@st.ritsume.ac.jp

印刷所 株田中プリント
